

愛（新しき世界へ 1969年6月号）

“イン・ヤン”誌 1969年2～3月号

G・オーサワ 著

後藤光男 訳

食物と生命現象とは密接なつながりがある。食物なくしては一切の生命現象は存在しえない。成長、背丈、力、賢明さ、無知、思想、態度、行動、一人種又は一民族の繁栄と没落等、すべてが影響され、すべて我々の食べたり飲んだりするものによって決定され規制される。

社会生活の基礎である愛と結婚もこの規則の例外にはならない。

人間生活の二つの最も重要な原動力は性慾と食慾だということはよく知られた事実である。そのためにこの二つは最も重要な主題として多くの説明が与えられてきた。

性慾から完全に解放されることが出来た人々でさえも食慾を諦めることはどうしても出来ないと言っている。飢えは人間生活の最大の動機となるものである。性慾はその次に来る。もし長期間ものを食べなければ死んでしまうであろう。我々は生きている限り飢えによる深い影響を感ずるのである。この飢えの力の不可抗力性を体験しようと望む人は何日間が断食するだけで足りる。

私は性慾の力及びその重要性を過小評価しようとは決して思わない。歴史はこの力の激しさの証人である。この力は英雄や皇帝達を凡人の域に迄引き下してしまった。

“すべての犯罪の蔭には婦人あり”と迄言われる程である。

最も原始的な生活水準においてでも我々が生きているのは我々の食慾のお蔭である。だから我々が生きているこの生活に感謝するならば、我々を生かしている飢えに対しても感謝すべきであろう。

健康な人は食慾が盛んであり、最も簡単な食餌をもおいしく食べる事が出来る。……たとえそれがおむすび一つだけの食餌であっても。飢えは何とスバラシイ自然の賜物であろう!…誰がこれなしに過すことが出来ようか?

人間にとって真理の道、完全な実現への道だと思われる全き宇宙への理解は、次の目標達成のための実際的方法を教えてくれると私は信じている。

1 一それなくしては個人の生命は存在出来ない飢え。

2 一社会生活の基礎であり、人種、民族、全人類の基礎である性愛。

これつまりマクロビオティック(巨視的養生法)なのである。

人間の慾望の中で食べる慾望は断然早く、生まれて後最初の日に見られる。もし我々が赤ん坊が母親の乳を求めて泣くのを聞き、乳房から乳を吸うのを見るならば、それこそは

生きんとする意欲の奇蹟的な力を目撃することなのである。

7才か8才で子供の知的慾求が目覚める。子供は知ることを要求する。同じ頃に異性を意識しはじめるのである。

男の子は16才で成年となるが、女の子は14才で月経がはじまる。

女子の生物学的身体構築は21才で完成し、その時母となる準備が出来る。これに対して男子の方は24才で父親となる準備が生理学的に出来、異性を求める。

これが男女における愛の年令であり、避けることは出来ない。これらの年令は人種や民族によって多少のちがいはあっても一般に規準とされるものである。

一つ確実なことは、もし女子が21才で、男子が24才で異性への慾求が現われなかったとしたなら、それは決して自然ではないだけでなく、宇宙の秩序を犯すことである間違った食習慣によって引き起された深い病気のしるしなのである。それは女なら7才迄に、男なら8才迄に、重大な食餌の誤りがあったのである。食養を注意深く守っている人々はこのようなことには決してならない……彼らは異性に非常にひかれ、愛の喜びを知るのである。

女は7年毎(7、14、21才等…)、男は8年毎(8、16、24才等…)に生理的にも心理的にも周期的に変化が起るということは興味深い。

生物学的に言うと、人体の細胞は丸7年で完全に入れ替る。男の子よりも生れつき陽性な女の子は陰性の食物にひかれ、この生物学的法則に従って急速に変化する。生まれた時既により陰性であった男の子は陽性にひかれる。だから男子にあってはこの変化は8年毎にはじめて起る。(これは女子の生物学的優性を説明する鍵である。)

例えば、女子は28才(7才の4倍)で十分に成熟する。そして性的生命力は最も旺盛となる。この時期が危険困難な時期と考えられるのも驚くにあたらない。35才(7才の5倍)で彼女らは静かになり、精神の或る性質が見えはじめる。42才(7才の6倍)で彼女らの精神生活はより深くなる。49才(7才の7倍)で月経と性的生命は終り、婦人は遂に平安を見出す。

男の子は32才(8才の4倍)で男性として成熟する。40才(8才の5倍)で精神生活がはじまり、48才(8才の6倍)で十分に深まり、思想家となる。その剛健さが本当に現われてくる。男は56才(8才の7倍)で生涯の果実を刈取りはじめる。64才(8才の8倍)で性的生命は終了し、彼らの本当の生活を平和と最も深い精神性の中にはじめる。

両性にとって、彼らの周期の6倍(男では48才、女では42才)が身体的生活と精神的生活との間の境界をなす。この時期から彼らは肉体や物質に関することからだんだんと解放されていき、永遠平和である精神性に達することが出来る。彼らは自由となる。

自然の秩序と一致しないような生活をする人々がいる。彼らは決してこの王国に入ることがない。彼らは年を浪費し、性慾や食慾によってひっぱりまわされ、だんだんと不幸になっていく。

陰と陽とが互いにはげしく引き合うことは自然の根本法則の一つである。男(陽)と女(陰)の場合、その牽引力は十分に強く、その結果彼らは永続的幸福な結婚において合一するこ

と出来る。

7才で女の子には女特有の、男の子には男特有の本能的性格が現われはじめる。この時期からよく注意して見ると、女の子は女らしさ(陰)をもち、男の子は男らしさ(陽)をもちはじめている。

日本では昔からこの年齢からは出来るだけ男の子と女の子を離しておいた。彼らは決して互いに隣に坐らず、学校でも公園でも一緒に遊ぶことがない。この隔離は結婚迄つづけられた。

こうして、常々の社会的接触から起る親しさから一方の性の本能的特徴が他方の性のそれに影響を及ぼすという機会が殆んどなかった。陰性は益々陰性となり、陽性は益々陽性となった。このような教育により、異性への牽引力は一層高い点に迄発展することが出来る。(兄弟姉妹にとってはこの規則は明らかに当てはまらない 1) 彼らは同一の屋根の下に生活し、必ず一緒にいるからである、男女相互の性的牽引力は異常な環境下においてのみ感じられる理由を物語っているではないか?)

このように、女の子が潜在していた陰性を、男の子が潜在していた陽性を完全に発揮させるためには14~16年が必要であろう。

彼らが食養を実行している場合、特にそうである。

陽は求心力をあらわし、陰は遠心力をあらわす。こうして愛においては男性(陽の見かけ)は“攻撃的”であり、女性(陰の見かけ)は“受動的”である。これは自然の現象である。実際この調和した愛の偉大な理念は自然であり、食慾と同じく全く自然である。愛を神聖と見なすことはそれを罪と見なすことと同じく間違いである。

すべての領域で男女のお互いの態度は陰と陽が反対であるように全く反対である。32才(8才の4倍)から男子は物質的問題(事業、職業、社会的地位)に没頭する。彼は実際的になる。女子は28才(7才の4倍)で逆に彼女の理想主義的傾向を促進させる。彼女はよりロマンチックになる。

愛において男子は兎を追う狩りの犬であり、山、谷、或は河をものともしない。彼はその獲物だけを見て周囲の景色を決して見ようとしない。彼は狩りの喜びを味わい、決してその困難さを感じない。女子の方は反対に兎に似て無我夢中で逃げかかれようとする。

もしも兎が逃げようとせず、犬に従い或は犬を求めさえするならば、この状態は決して正常ではなく、永く続かないであろう。これは病的又は残酷な或は両方の性質の女性の態度である。・・・兎の毛皮に身をかくした狼!かような女性は結婚後にムリな生活を押し付けることによって夫を殺し、或は他の犬を誘い、消え去るであろう。

このことを理解する者は誰でも愛に成功するであろう。

“愛は盲目である”とチャーサー、シェークスピア、コルリッジ、エマーソンのような作家は書いた。愛が発現するや人生は必ず複雑となる。それが我々の中に輝くや、すべてに影響を与える。それはそれなくしては味気ないところの深み、美、生活の芸術を付け加えてくれる。

すべての国の文学にこの感動的な劇のいろんな面を表現した無数の物語がある。愛が余りに強烈でそのため我々は圧倒されてしまい、その我々人生における重要さや意義を理解出来ないことが起り得る。

しかしかような激しい情動が適切に導かれることは何と重要なことであろう!もし我々が強まるなら、我々の人生は悲劇に向うのである。しかし、食養の原則に従ってものを食べるなら、正しい道を発見することは何とやさしいことであろう!

この情動が年令と共に沼池に落ちた小石のように消失するのを見ることは面白いことである。これは信じ難いことである。なぜなら、この愛は昔はあのように抗しがたい程激しいものだったからである。

まとめてみると、子供の時代に余りに多くのサトウ菓子を食べた男の子は青春期に無気力となるであろう。この間に余りに多くの肉をたべるとその性生活において残忍乱暴になるであろう。しかし、最大の不幸はサトウ菓子、乳製品、コーヒー、工業製品等非常に陰性な拡散性の大きい食品ばかりで作られた食餌をとった人である。彼は性生活がもはや全く不能となろう。

いろいろな国民の文化・芸術、云統、演劇、歴史・映画・小説・哲学、詩一を研究し、そして彼らの食生活を十分記憶してごらん下さい。あなたは食物と愛との間に密接な関係があることにすぐに気がつくことでしょう。あなたは食養によって育った人がなぜ彼らの性をコントロール出来るかを理解するでしょう。

これは無双原理、陰陽の理論の応用の一つなのです。

(食養人生読本第1章より)

どのように判断するか?どのように定義するか?

我々の学校は判断力の学校であり、我々は知的水準だけが価値をもつと思われる時代に生きているのだから、この問題は最も重要である。知識を交換し、議論し、聞いてもらうためには、我々が特に判断するための知的能力を発展させねばならない。これは更に我々がより高い意識水準に到達するのを助けるであろう。

オーサワ先生はこのための7ヶ条を我々に残した。定義するとは陰陽によって定義することである。

- 1 一起原、源或は原因を求めること
- 2 一構造、構成を発見すること
- 3 一形体、様相、外見を分析すること
- 4 一機能又は機能のメカニズムを見つけること
- 5 一価値或は意義、或は宇宙における位置づけを調べること
- 6 一変化、発展の諸段階を見ること

7 一目標、目的、到達点を求めること

“定義を決めること、これは非常に重要であり、考えること、祈ること、瞑想することである。”(G.O.)

それは生命の尺度で判断することである。静止したもの、死んだものの科学、近代科学においては(2)(3)(4)だけが一般に検討されている。確かに大変な精密さで分析が行なわれる。しかし、人工的にコマ切れにされた、固定して動かない現実の判断だけが分析されている。それでもしばしば有用で興味あることもあるが、”自然に発展する”現実をその総体において判断するためには全く不十分である。自然による科学には限界がある。それは相対現象界の我々の宇宙と同じ生命であるところの生命の主要な現われである時間一空間中のすべての領域で(変化の早さだけは様々である)永久に変化する分割出来ない一なるもの、現実とそれらを混同しない時にのみ、我々に又とない貴重な知識を与えてくれる。

確かに科学はその歴史の転換期に達した。

現実により近づいてこれを取り囲むためには、科学は自らの狭い枠をのり越えて自分自身を再検討せねばならない。しかし、それは困難なしでは行なわれない。なぜなら、自然を変化させたり或は少なくとも様相の一部をも変化させることなくしては或る現象に”触れ”又はそれを計測することは出来ないからである。(そしてこれは進展の速度が極めて急速である無限に微少な領域において、又いわゆる生命の科学において特に真実である。)物質の極限にはもはや物質がない……そこには空がある。それは無数の特性をもつが、定義も計測もしがたい。科学は道具以上のものではありえない。それは人々がしばしば過信しているような全く純粹の真理では決してない。

ただ無双原理だけが、全体の一部にすぎないが、思考によって自ら没頭する能力一直観と英知一をもっている我々自身以外の何ものにもよらず、じかにして総括的な把握を行なうことを我々に許すのである。

定義することを知ろう、そして判断することを知ろう!

タバコについての無双原理の応用の適例がポルトマネック会議(1965)の記録第一巻 77 頁にある。

M.L.